



われらが常備役

WARERAGA JOBIYAKU

気になる乳がんの話 乳がんとエストロゲン

川口工業総合病院 プレストセンター(乳腺外科) 山口 由紀子



現在、わが国では、年間9万人の女性が乳がんと診断され、その数、成人女性の12人に1人の割合といわれています。また、年間1万3千人が乳がんで亡くなられています。

先日開催した乳がん講座の宣伝のため、FM kawaguchi にお邪魔した際、女性ホルモンと乳がんとの関連性について少しお話ししたところ、DJの金谷美奈子さんから、大変興味深いとお言葉をいただきました。今回は、このお話を書いてみようと思います。



女性の体には、女性ホルモンというホルモンがあり、妊娠、出産、月経などをコントロールしています。女性ホルモンには、プロゲステロン(黄体ホルモン)、エストロゲン(卵胞ホルモン)の2つがあります。この2つのホルモンが上手く組み合わせさつて、月経周期や妊娠が成立します。

『エストロゲン依存性』の病気というのは、『エストロゲンだけが低い状態だと進行してしまう病気』ということです。乳がん、子宮体がん、子宮筋腫、子宮内膜症は、『エストロゲン依存性』の病気の代表格です。

月経周期の一時期に、エストロゲンだけが低い状態が生じます。つまり、生涯に経験する月経の回数が多い＝妊娠、出産回数の少ない人ほど、エストロゲンだけにさらされている時間が多くなるということになります(妊娠中は、エストロゲン、プロゲステロン両方が高い状態になります)。つまり、妊娠・出産回数が無い、少ない人や、初潮年齢が早い人、更年期障害の治療にエストロゲン補充療法を長期間受けていらっしゃる方は、そうでない人に比べて乳がん発症の確率が高いといわれています。

このように書くと、エストロゲンがまるで悪者のようですが、エストロゲンには、強い抗酸化作用があり、動脈硬化を防ぎ、骨をもろくしない作用もあります。また、食欲を抑制し、天然のダイエット作用もあるといわれています。また、肌の保水作用もあり、女性らしい体を維持するには必要不可欠なホルモンです。



がんの発症には、多くの要因がかかわっていますので、このような方が、必ず乳がんを発症するという訳ではありません。また、反対に多産の女性の方が、全く乳がんを発症しないという保証はありません。現在のところ、これといった確実な予防方法は発見されていないので、あからさまにエストロゲンを排除したり、怖がる必要はありません。

乳がんは、早期に発見し、きちんと治療をすれば、治る病気です。そのためには、毎日、自己での乳房チェック(乳房をよく見る、触る、しぼる)と専門施設での定期的な健診(マンモグラフィ、超音波検査)を受けることが大切です。

30歳以降から意識されることをおすすめします。

女性みなさん、一度、乳がん健診(マンモグラフィ、超音波検査)を受けてみてはいかがでしょうか。

多くの方々に、乳がんに対する正しい知識と理解を持っていただくため、当院では、乳がん講座や講演会活動を行っています。ご興味ある方はご連絡ください。

